（別紙２）

審査の結果の要旨　　氏名　吉田光男

本論文は、朝鮮近世都市社会史研究の一環として、朝鮮王朝（1392-1910）の都であり、かつ当時の朝鮮における最大の都市であった漢城（現在のソウル）を対象に、戸籍や官員履歴書といった一次資料を駆使しながらその住民や街区の様相の復元を試み、漢城がもつ朝鮮近世都市としての性格を明らかにしようとしたものである。

漢城をはじめとする朝鮮近世都市に関する歴史学的研究は、比較的近年に至るまで必ずしも研究の活発な分野ではなかった。1990 年代以降、ソウルについての学術的関心の高揚にともない、韓国において古代から現代までのソウル史に関する多様な研究成果がみられるようになった。しかしながら、近世を主要な対象とし、しかも都市社会のあり方に着目した研究となると、いまだその数は決して多いとはいえないのが実情である。

本論文は、そうした研究の現状にあって、近世の漢城を対象にその都市理念や空間構造、住民の居住と移動の状況、洞とよばれた住民の居住空間の形成様相、漢城商業の中核的存在として国家から独占販売権を公認された市廛と呼ばれる商人組合の性格などを考察した。朝鮮近世の漢城に関する都市社会史研究のまとまった成果としては、その嚆矢をなすものである。まずはこの点にこそ、研究史上における本論文の意義を認めることができる。

上述のごとく、本論文では、近世朝鮮における漢城の都市理念やそれが実際の空間構造にどのように反映されているかといった巨視的な考察もなされており、そこでも近世都市としての漢城の性格について斬新な議論が展開されている。しかし、本論文の中心をなすのは、漢城の住民と街区についての微視的な考察である。とりわけ住民の居住と移動の状況に関する考察は本論文のもっとも重要な成果であり、大きな意義の一つであるといえる。

本論文では漢城住民の居住と移動の状況を考察するにあたり、朝鮮王朝政府が作成した漢城の戸籍から住民に関するデータを抽出し、統計的な処理を施したうえでその分析を試みた。また、とくに漢城に居住した官僚層については、現存する履歴書群を活用し、戸籍同様これを統計的に処理して分析した。そして、こうした一次資料の緻密な分析によって、性比の低さ、戸内の非血縁同居人数の多さ、官僚・両班身分の構成比の高さといった住民居住のあり方や、各身分・階層の雑居性、住民の移動頻度の高さなどの事実を明らかにし、そこに朝鮮近世都市としての漢城の特質を見出した。

このうち、とくに雑居性や移動頻度についての指摘は、これまで漠然と受け入れられてきた通説的理解に強く見直しを迫るものであり、その手法と緻密さにおいて高く評価されるべきである。これらは資料的な制約により 20 世紀最初期の状況であるという点で議論の余地を残すことも事実ではあるが、この時期の朝鮮には近世的な社会的諸関係がまだ色濃く残っていたことを勘案すれば、その結論は十分に説得力をもつものといえる。むしろ、今後の当該分野の研究に大きな刺激を与えるものであろう。

近世初頭から近代移行期に至る時期的な変動様相や都市下層民の動向などについては、本論文では十分に扱われていない。しかし、研究および資料の現状からすればそれはやむを得ないというべきであろう。本論文は、そうした点も含めて今後の研究の基礎を築いたものとして評価されるべきである。よって本委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授与するにふさわしい業績として認めるものである。